

先代の想いと、苦難のはじまり

思えば、この日が、社会貢献の家（ホーム）のはじまりだった。

「企画書をつくって大阪市に出すように」と、先代から渡された1枚の紙。そこには、特別養護老人ホーム（特養）建設計画公募と書かれていた。当時、大証二部上場を果たしていたグルメ杵屋は、「東へ」を合言葉に東証二部を目指し、東京進出を推し進めていた。先代とは、創業者の椋本彦之。既に、一部上場を成し遂げ、上場記念事業で特養をつくる計画を企てていた。早速、私たちは公募に参加し、1995年の冬に施設計画を開始した。施設名は「グルメ杵屋社会貢献の家」。

その時代、「ゴールドプラン」という、高齢者保健福祉推進10カ年戦略が打ち出されていた。特養、ホームヘルパー、デイサービス、ショートステイの整備による在宅福祉対策で、高齢者の最後の住処が必要だった。市場拡大を期待した社会福祉法人がこぞって公募に手をあげたなかで、「グルメ杵屋社会貢

献の家」が選ばれたのである。

ホームの建設場所は、住吉住之江の郵便局本局の跡地で、特定郵便局だけ残した空き地。税金投入されるだけに、近隣の方々に設計、工事の説明をし、賛成を得なければならぬ。準備万端、説明会を開催したところ、「老人ホームなど、ほしくない」と、住民から建設の理解を得られないという苦難が待ち受けていた。

4人部屋が当たり前の時代に、個室優先としたため建物は6階となり、その圧迫感が反対の引き金となっていた。さらに、老人の憩いの家ができるという噂に、住民の皆さんは、公民館のようなものを想像されていた。

「我々の生活権は、どないお考えですか？」

「ここは終の棲家。尊厳を持って生きる家だから、将来を見据えてどうしても必要なのです」

病院と老人ホームの違いを何度も語り、一軒、一軒、住民の家を訪ねては、少しずつ理解を深めてもらっていった。そして1ヶ月、ある住民宅を訪問した時のこと。

「あんたら今回は行政含めここまで逃げんとやってくれた。まあ、うちきて、スイカでもくってけ」

このひと言で空気が変わり、建築了承の流れとなった。真夏の暑い日だった。

（語り手 開設メンバー）

